



＜概要＞	
病床数：	824 床
従業員数：	8,648 名
平均在院日数：	6.1 日
年間手術件数：	17,740 件
(日帰り手術を含む)	
年間救急患者数：	41,110 人

ラッシュ・メディカルセンターはイリノイ州シカゴの中心部から南に車で15分程の場所に位置するイリノイ州で最大規模を誇る私立病院である。ラッシュ・メディカルセンターは1837年に設立されたラッシュ医科大学をルーツとして、長い間シカゴ市における医療サービス提供の中心的な役割を担ってきた。ラッシュ・メディカルセンターは824床の急性期病院であるメイン・ホスピタルを中心として、メイン・ホスピタルの一部である120床のラッシュ小児病院、110床の長期療養及び、入院患者の回復・リハビリテーションを行うバウマン・ヘルスセンター、そして医療従事者の教育機関であるラッシュ・ユニバーシティーから構成されている。

案内して頂いたカテーテル部門には独立したカテーテル室が全部で3つあり、治療の種類によってそれぞれの部屋に患者を振り分けているということである。各カテーテル室、及び3つの部屋が共同で使用するエリアにはオムニセル社の電子キャビネットがそれぞれ設置されている。各カテーテル室に設置されているキャビネット内には、主にその部屋で行われる頻度の高い治療に使用される診療材料が配置されており、共用部分のキャビネットには全ての部屋が共通して使用する診療材料、及び特に高額なカテーテルなどが収納されている。ナースやドクターなどの施術者はこれらのキャビネットに収納された物品を使用する方法に従って取り出すことにより、誰が、いつ、どの患者に、どの物品を使用したかが自動的に記録されることになる。自動的に記録された使用情報は、物品管理部門と事務部門へ、それぞれ在庫の補充、及び患者への請求情報として自動的に送られるのである。

ラッシュでは電子キャビネットの導入により、以前の紙ベースで行っていた在庫の補充、患者への請求事務に関わる正規従業員を12人削減することができた。また、カテーテル室へのキャビネット導入に関して発生したコストは、導入後の在庫削減効果などによって、7ヶ月間で回収することができたとのことである。カテーテル室では高額な診療材料を使用する頻度が高く、特に導入効果が高いそうである。

カテーテル室見学の後、電子調達システムの説明が行われた。ラッシュで導入されている電子調達システムはオムニセル社のオムニバイヤーと呼ばれるシステムであり、ラッシュではこのシステムを活用して、年間810万ドル(約8億9千万円)相当、7万件以上の診療材料の発注業務を行っている。ラッシュ病院では以前、カテーテル室でのみオムニバイヤーを使用していたが、2003年7月以降、病院内の全部署における使用を開始した。このインターネットを介した電子調達システムでは、ブラウザを通して見ることのできる電子カタログから物品の発注を行う事ができ、また、病院特有のルールをシステムに取り入れることにより、必要な場合は発注の承認等もオンラインで行える。許可されている職員であれば、誰でも発注を行うことができる一方、どの物品をどの業者からいくらで購入するというような事も一元管理することができ、業者との契約に沿った発注を行うことができる。

以前のシステムの場合、診療材料の発注は全て紙ベースで行われていた。まず各病棟や部署のナースがそれぞれの作業部署における在庫をチェックし、足りないものに関しては発注伝票を作成、伝票は中央材料部で受け取られた後、予算の確認が行われ、決められた承認のプロセスを経た後、病院の財務システムへ入力を行うと共に、業者へ発送するファックスの文書が作成されていた。これに加えて、新規で発注するような物品の場合は、どの業者が取り扱っているかもわからないので、各業者から配布されている分厚いカタログの中から物品を特定し、電話をかけて在庫を確認するといった作業も発生していた。このような煩雑で時間を要する発注作業が電子発注システムの導入により大幅に効率化されたとのことである。

病院見学終了後、病院内カフェテリアにおいて簡単な質疑応答を行った。会話の中で、ラッシュ病院の病床数と平均在院日数が話題となり、病院側担当者から説明があった。ラッシュ病院でも包括払い制度の導入以後、政府の保険システムや保険会社からの支払医療費の削減によって平均在院日数の短縮を余儀なくされ、現在では6.1日まで短縮されていると言う。しかし、短縮された平均在院日数をカバーするだけの病床利用率を得ることは困難であり、現在では病院内に空きベッドが増えてしまう結果をもたらしているそうである。以前は1200以上あった入院病床数も現在は820床あまりとなり、現在もさらなる減少が予測され、600床程度まで減りそうだということであった。今では、そのようにして空いてしまった病室を何とか利用しようと、病室をドクターのオフィスに改造したり、在宅治療の出先機関として利用するなど改装を行っているという。話を聞きながら、昨今我が国でも取り上げられている在院日数の短縮問題の先に必ず起こるであろう大きな問題を実感した。